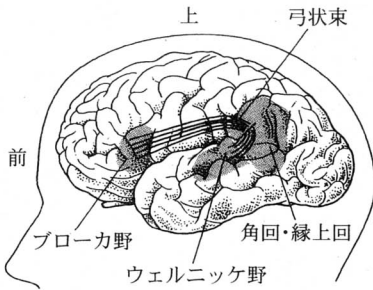


言語の脳科学 脳はどのように ことばを生み出すか

著者インタビュー

新たな斬り口・なぜ日本人は英語苦手

日本の手話、混乱回避図れ

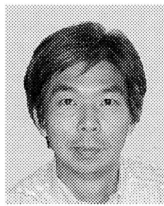


大脳皮質の言語野(本書から)

文献(N. Geschwind, "Language and the brain", Scientific American, 226(4), 76-83(1972))を改変

東京大学大学院総合文化
研究科
酒井邦嘉助教授

第56回毎日出版文化賞を受賞した「言語の脳科学―脳はどのようにことばを生み出すか―(中公新書・945円)は、言語というユニークで歴史ある究極の難問に脳科学からの新たなアプローチを試みた。著者の酒井邦嘉助教授は



「言語はあまりに身近なものだけに、学問としてとらえるのが非常に難しい」と話す。

「しかし、この本で言語に関する脳の仕組みを知ってもらえば、第二言語として

言語学者、ノーム・チョムスキーの言語生得説が、最新の脳科学で裏付けられようとしていると指摘。言語と心の関係、脳に備わっている普遍文法、言語野の働きと失語症、母語の獲得の不可思議さなど、ことばを生み出す脳のメカニズムを多面的にわかりやすく解き明かしていく。

「中でも一般の人に理解してほしいのは、本書で取り上げた手話の問題。音のないろう者の言葉の世界で用いられる日本手話は自然部であり、サイエンスの対象だ」と断言する。激しい賛否を巻き起こした米国の

現状のろう教育の矛盾を訴える同助教授は、日本手話を母語とし、健聴者とのコミュニケーションは書記日本語で、と考える「バイリンガルろう教育研究会」の12月11日の講演会で、「脳が生み出す言語としての日本手話」を講演した。「これまで言語の研究は文系の領域とされてきたが、文系と理系の境界にある言語の脳科学では、人間そのものを対象とする人間科学を確立することが必要です」

脳科学からの言語に対する理解が、言語をめぐる多くの誤解を解いていく。